

□ 次の1～3の問いに答えなさい。

1 次の――のひらがなを漢字に直しなさい。送りが必要なものはそれも書きなさい。

- ① 万が一の時にあわてないように防火設備をてんけんする。
- ② さまざまな機能をないぞうした携帯電話が普及した。
- ③ みつべいされたコップの中にあるロウソクの火を消す。
- ④ 今シーズン限りで監督をかいにんすることが理事会で決定された。
- ⑤ 日本の若者がアニメにかんかされることをおそれている。
- ⑥ 豊かな自然の中でゆったりと過ごすために時間をさく。
- ⑦ かたい真面目な頭をやわらかくして考えることが大切だ。
- ⑧ 万全の状態で入学試験にのぞめるよう規則正しい生活を送る。
- ⑨ 今日は両親がともに仕事で家をあけることになりそうだ。
- ⑩ 日本とアジアの国々が新たな信頼関係をきずいていく。

2 次の――の言葉の使い方として、他と違うものを一つ選んで、記号で答えなさい。

① 「どうして」

ア みんな我慢^{がまん}をしているのに、どうしてそんなわがママを言うの。
イ こんなになる前に、どうして早く私に相談してくれなかったの。
ウ レシピ通りに作ったのに、どうしておいしくないのだろう。
エ いつまでたっても子どもだと思っていたが、どうしてすっかりしてきている。
オ こんな簡単な問題が、どうして理解できないのだろう。

② 「たぶん」

ア このクラスで学校に一番近いのは、たぶん私でしょう。
イ 声をかけられなければ、たぶん気づかなかっただろう。
ウ この天候だと、遭難のおそれがたぶんにあるでしょう。
エ お正月の帰省は無理だったけれど、お盆はたぶん大丈夫だろう。
オ 天気予報によると、明日のクラスマッチはたぶん晴れるでしょう。

③ 「まるで」

ア 私は他人の言うことなど、まるで気にならない。
イ 説明書の記述は難しく、まるで意味がわからない。
ウ 初歩的なミスが多くて、まるでなっていない。
エ ラッコが手を器用に使う様子は、まるで人間みたいだ。
オ 昔見た風景と比べると、まるで変わってしまった。

④ 「まず」

ア 会議を始めるに当たって、まず初めにメンバーを紹介しよう。
イ どこにいても、どんなときにも、まず家族のことを考える。
ウ 生きがよいも何よりも、まず衣食住が大事である。
エ ここまで準備できれば、まず良いことにしましょう。
オ 席に着いたら、まず氏名を書き込んで下さい。

⑤ 「きかない」

ア 力が入らず、指先がきかない。
イ 人のいうことをまったくきかない。
ウ 薬がきかないなら、点滴きかない。
エ ここまで来ると、やり直しがきかない。
オ 年をとると、無理がきかない。

3 次の()にあてはまる年中行事を、あとから一つずつ選んで、記号で答えなさい。

初詣^{はつもうで} ↓ 豆まき ↓ (①) ↓ こいのぼり ↓ (②) ↓ (③) ↓ (④) ↓ お月見 ↓ (⑤)

(ア 父の日 イ 七夕 ウ 除夜の鐘 エ 母の日 オ ひな祭り)

二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。難しい語句の意味には本文中に(Ⅱ)で「注」をつけています。

次の文章は、ロボットについて書かれた文章です。この部分より前には、ロボットの動きをより人間らしくしていくための方法について述べられています。

私がある休日にてかけた「Dialog in the Dark」というイベントの話から始めたいと思います。

「ダイアログ・イン・ザ・ダーク」——暗闇の中での対話」と名付けられたこのイベントは、一九八九年にドイツで誕生したもので、ひと言でいうと、日常的な生活空間を真の暗闇の状態に置き、私たちがいかに行動できるのかを体験するイベントです。真の暗闇という非日常性の中で、視覚障害者の立場を体験的に理解できるだけでなく、**①**他人とのコミュニケーションの大切さを知ることなど、さまざまな意義をもっており、日本では一九九九年に第一回が開催されています。

そこでさっそく私も出かけていったのです。**②**が、参加者はまず入口で、荷物や身に付けていた光るものなど、たとえば蛍光塗料を使った腕時計などもすべて外してロッカーへ置いていきます。そして入場に先立って簡単なレクチャー(Ⅱ説明)を受け、その場で八人ぐらいのグループを組みます。各グループには各一人、ナビゲーター(Ⅱ案内をする人)として会場内を誘導する視覚障害者の方がつき、そのひとの引率で、暗闇の中へと進んでいくのです。

さあ、ここから先は、いよいよ自分の触覚と聴覚だけに頼ります。会場内には居間や廊下などを**③**模した空間が設けられているのですが、まるで迷路に迷い込んだように感じられます。光を遮断した真の暗闇ですから、おぼろ月夜のような具合にはいかず、手元足元さえまったくの闇です。どこに何があるのか、自分はどこにいるのかといった基本的なことがまるでわからないため、動こうとはするのです。**④**が、思った以上になかなか動くことができないのです。私たちはふだんなんと視覚に頼りきって過ごしていることだろう、そして「目の見えないひとの立場で考える」と頭で考えるのと、このような空間に放り込まれるのでは、なんと違うだろう——と実感します。ナビゲーターの方が「ここに段差がありますよ」というように教えてくれ、正しいコースへ連れ戻してくれたりするからいいようなものの、もしはぐれてしまったら、残された私たちにはいったいどれだけの行動力があるだろう……と考えると、実に**⑤**心許ない状況です。

一方ナビゲーターの方は、会場のどこに何が配置されているかといったことをよく理解しており、細い通路もさつとすり抜けてしまうという具合で、**⑥**私たちとは比較にならない、圧倒的な行動力を随所で発揮します。

この違いの原因として考えられるのは、私たちはふだん、主に視覚による**⑦**フィードバックを頼りに行動しているからではないかということだと思います。私たちはコップをとってお茶を飲むという日常的な行動ひとつでも、たとえばここにコップがあるということを目で確認しながら手を伸ばし、何かに触れたからこれはコップだから力を弱めてというように、ほとんどがフィードバックに頼って行動しています。フィードバックに対してアクション(Ⅱ行動)だけを使った通りに行うことをフィードフォワードと言い、本来人間はフィードフォワードと、フィードバックによる修正を組み合わせる行動しているわけですが、私たちのふだんの生活ではこのうち視覚フィードバックが随所で使われています。逆にナビゲーターの方たちは視覚以外のフィードバックと、フィードフォワードでほとんど行動することができないかと考えられます。

また、グループの八人のメンバーは入口で出会っただけの顔も知らない者同士なのです。**⑧**が、入場以来、なぜかしら自然と声をかけて励まし合い、いつの間にか手に手を取って助け合いながら進んでいます。体験の中には、「いま、ナビゲーターの方がいなくなってしまうたら、私たちはここから脱出できないよなあ」とふと思われるような瞬間もあり、そのような困難な事態に遭遇すると、誰からともなく協力体制を強化しようとしめます。たとえば、ほとんど無意識のうちに次のひとの手を取っていたり、「ここ、気を付けてくださいね」といった言葉も、ごく自然に口から出てくるのです。

こういったことは「ダイアログ・イン・ザ・ダーク」への参加体験の一端に過ぎません。**⑨**が、**④**期待以上に、日常生活を振り返る貴重な体験となったことは間違いありません。

さて、ロボットの話へ戻りましょう。私たちがふだん敏捷と言っているいいほどスムーズに動けるのは、やはりなんといっても視覚によるフィードバックのおかげだということがわかってきました。ところがロボットの場合、実はその肝心の視野が、いくらセンサー(Ⅱ感知する装置)やモニター(Ⅱ見るための装置)を搭載しても、非常に限られたものでしかないのです。そのため人間にはあつと言う間にわかってしまうことが、これを計算して、あれを計算して、というふうに一つ一つゆっくりとわかっていくしかないのがロボットだ、ということになります。

★たとえば知らない部屋へ入って来た場合には、私たちは軽く見わたすだけでこの部屋はだいたいどのくらいの広さで、奥の机にパソコンがあって、入口付近にコピー機があって、テーブルの上にはお茶が二つ置いてあって……といったことが瞬時にわかってしまうわけなのですが、ロボットの場合は近くを見ているときは遠くを見ることはできないし、しかも見えたものがお茶なのかパソコンなのかといったこともじっくりじっくり考えて、やっとわかるというレベルにあります。たいへん不慣れた環境で、ともかく行動しなければならぬという意味では、暗闇に放り込まれた私たちと似たようなものだと言えるでしょう。

また現在のロボットはふつう、自分が置かれている環境をセンサーなどを用いてできるだけ情報を集め、なるべく正確に記録し、ちやうど図面を引くように現実を写した地図を描くことを目標にしています。たとえば部屋の壁はどうなっていて、ここには四角いものがあるから避けて通らないとぶつかるといったように、ひとつひとつ覚えていくわけです。ところがこの方法では基本的に、**⑩**物が存在するかどうかは一〇〇%または〇%であって、つまりあるかないかのどちらかになってしまふのが弱点です。たとえば、あのへんから音がしたとか、さっきはAさんは机のまわりにいたような気がするというようなあいまいな情報を、うまく取り扱うことができないのです。そこで一つには、視覚の処理やそれをロボットがわかるようにどう表現していくかが大きな課題になってきます。

そしてもう一つには、私たちが暗闇で経験したように、ダイアログ(Ⅱ対話)による助けが大きな意味をもつて考えると考えられます。部屋全体をスキャン(Ⅱ読みとる)するだけで何十分もかかってしまうロボットの立場からすると、判断に迷ったり、わからなかったりしたことをひとに質問し、教えてもらうというコミュニケーションの機会があれば、ずっとスムーズに人間が望む動きを実現できるからです。さらに教えられたことを学習結果として記憶し、次回からは自力で解決できる可能性もあります。ロボットが賢くなっていく過程には——ちやうど暗闇で私たちが助け合ったように——ダイアログによるやりとりがどうしても欠かせないと考えられるのです。

問一 ①・②の語句の本文中での意味として正しいものを、次の中から一つずつ選んで、記号で答えなさい。

①「模した」

- ア まねてつくった
- イ 複雑につくった
- ウ 小さくつくった
- エ 試しにつくった

②「心許ない」

- ア 数多くのことを想像する
- イ 不思議で、もっと知りたい
- ウ 不安で、頼るものがない
- エ 自分の限界にいらいらする

問二 ③の「が」は、前後の表現をつなぐ役割を持っています。つながりがたが他とは異なるものを一つ選んで、記号で答えなさい。

問三 ①「他人とのコミュニケーションの大切さ」とありますが、このイベントに参加した結果、《コミュニケーション》が大切であると筆者が考えたのはなぜですか。次の中から正しいものを一つ選んで、記号で答えなさい。

- ア 一人では簡単に解決できない問題であっても、互いに言葉をかけあうことによって、より解決しやすくなるから。
- イ 日常での生活とはかなり異なった空間のなかで、人間がどれだけ行動できるかを体験するためのイベントであるから。
- ウ 最近では人間同士の関係が薄くなってきているため、昔のように協力しあう体制をつくりあげる必要があるから。
- エ 接する機会の少ない視覚障害者と積極的に会話を交わすということを通して、自分の視野を広げることができるから。

問四 ②「私たちとは比較にならない、圧倒的な行動力」とありますが、なぜナビゲーターにはこのような行動力があると筆者は考えていますか。②よりあとの部分の表現を用いて説明しなさい。

問五 ③「フイードバック」とありますが、わかりやすく言うところのどのようなことですか。本文に書かれていることから考え、次の中から正しいものを一つ選んで、記号で答えなさい。

- ア 素早く行動できるように、自分自身が経験したさまざまな出来事を頭のなかで整理しておくこと。
- イ 目に見えたものだけに頼らず、それ以外から得られる情報もうまく組み合わせて行動すること。
- ウ ある行動をおこなったあとに生まれてくる結果や反応にあわせて、自分の行動を決めていくこと。
- エ 身の回りの人物や物の場所をいつも意識しながら、その場に合った行動を選びとっていくこと。

問六 ④「期待以上に、日常生活を振り返る貴重な体験となった」とありますが、あとの部分でロボットのことについて述べていくとき、イベントに参加した体験を通して、筆者はどのようなことを振り返っていますか。次の中から正しいものを一つ選んで、記号で答えなさい。

- ア 光の存在は、人間の日常生活のなかで重要な意味あいを持っている。
- イ 身体に障害を持たない人は、ある特定の感覚に頼って行動することが多い。
- ウ 視覚障害者は、身体じゅうのさまざまな感覚を用いて行動している。
- エ 人間は、互いに協力しながら困難に対応していくという能力を持っている。

問七 「★」の段落で述べられていることを、左のようにまとめました。空らんにあてはまる言葉を、①については十五字以内、②については十字以内で書きなさい。

現在のロボットは、どんなに ① したとしても、その場の様子を ② という、人間のような能力を備えることが難しいということ。

問八 ⑤「物が存在するかどうかは100%または0%であって、つまりあるかないかのどちらかになってしまう」とありますが、

(1) なぜこのことは現在のロボットにとつての《弱点》だといえるのですか。「★」よりあとの部分を読み、本文の言葉を用いて説明しなさい。

(2) この弱点を解決していくために、これからのロボットにはどのような能力が必要だと筆者は考えていますか、説明しなさい。

③ 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。難しい語句の意味には本文中に(Ⅱ)で「注」をつけています。

中学一年生の佐田海月(「くーちゃん」と呼ばれている)は、学校で「飛行クラブ」という部活動に入っています。ある日、テニス部内の人間関係でつまづいた戸倉良子(こ)が、飛行クラブに入りたいと、海月に伝えてきました。良子に苦手意識を抱いていた海月は、友人の大森樹絵里(おもりじゅえり)に相談します。

すっかり聞き終えた樹絵里は、「そうかあ」と、まるでピンチにふさわしくないI相づちを打った。「そんな気はしてたけど」

「どんな気よ?」

「良子ちゃんさ、もしいづらくなってテニス部辞めるようなことがあったら、こっちくるだろうなって」

「なんで? どうしてウチ?」

私が(そんなつもりはなくても)誘ったから?

「だってあの人、くーちゃんのことすごく好きだから」

「まーたそんな冗談ばっか……」

「本当だよ。わかるよ、見てれば」

樹絵里はいつになく真剣そのもので、私はII言葉を失って相手の顔をまじまじと見やった。

「くーちゃんはさ、①『二人組』の怖さなんて知らないでしょ」

唐突に言われ、私は首を傾げた。

「体育でも、理科の実験とかそういうのでも、もつとすごくくだらない、暇潰しのゲームみたいなのだって。『さあ、今から二人組になって下さい』って先生とか子供会の役員さんとかから言われて、その瞬間、どんなに私がときどきしてるかって、知らないでしょ」

「え、何の話？」

「奇数のとき、余っちゃうかもしれない。偶数のときでも、余り者同士で仕方なく組むことになるかもしれない。あと、グループ分けでもさ。どのグループも、私のこと、いらなくなって言ったらどうしよう……そんなことはばかり考えて、胸がすごくときどきして、顔がカーッと熱くなって、体は反対にすごく冷たくなって……そんな思いついて、したことないでしょ、くーちゃんは。だってみんな、くーちゃんのこと好きだから。②みんなくーちゃんとなら、二人組になりたいって思ってるから。だから私、いつも必死だったんだよ。くーちゃんを取られないように……だってくーちゃんてば、先に『組もう』って言った子と組んじゃうから」

私がよっぽど変な顔をしていたのだろう、樹絵里はフローするような感じでやわらかく笑った。

「ゴメンね、それが悪いって言うてるんじゃないんだよ。全然逆。いつもすごくうらやましかったんだ。私さ、天然キャラだと思われてるけど、でもそういうの、自分で作ってる部分もあって……でもあんまりうまくいかなくて。どうしたらくーちゃんみたいになれるだろうって。最近、ちよつとだけわかってきたんだけど、みんなに好かれて、誰とでもうまくやっていける人って、距離の取り方がうまいんだよね。あんまり近すぎないの。私はダメ。好きな人には、ぎゅーってくっつきたくなる。それで嫌われるんだ、いつも。くーちゃんにも」

「え？ 私は別にジュジュを嫌ってなんか……」

びっくりして否定したら、③樹絵里はにっこりと、それはもう嬉しそうに笑った。

「うん、くーちゃんは優しいからね。でもね、私、知ってるんだ。五年から六年にかけて、私がクラスの中で気まづくなったとき、くーちゃんがかばってくれて。でもそのせいで、くーちゃんまでクラスで浮いちゃって……ゴメンね。私はさ、くーちゃんと二人組でいられれば、それで良かったの。だけどくーちゃんは、平気じゃなかったんだよね。急に私立中学行くなって言い出したの、だからだよ。私、くーちゃんの気持ち知ってたのに、くーちゃんと離ればなれになるのが怖くて、だから私も私立受けることにしたの。ゴメンね、ずっと謝ろうと思ってた」

何度も何度も謝られて、私は混乱していた。

樹絵里の話には、実のところ思い当たるものがある。樹絵里のことは大好きだったけど、一緒にいるのが辛いこともあった。ホントのところ、逃げてしまいたかった。女の子同士の微妙なパワーバランス（＝力関係）だの、繊細で時に残酷な人間関係だのを、一度すっかりリセット（＝もとにもどす）してしまいたかった。樹絵里抜きでゼロからやり直せば、うまくやれる自信があった。

こんな④ヒトデナシでヨコシマな動機での受験が、うまくいくはずもない。

もちろんこんなこと、樹絵里には言えない。正直私は彼女のことを侮（あなづ）って、自分より格下の、守るべき存在だと思っていた。もちろん心を許して大好きで安心できて、だけど時々イラつきでうざったい……たぶん、妹がいればこんなだろうなって感じ。

もしかしたら樹絵里は私のこんな傲慢（ごうまん）な思いをちゃんと知っていて。その上で「くーちゃんくーちゃん」とくっついてきて。私が思っているよりも、いや、ひょっとしたら私よりもずっといろんなことに気づいていて。

もし、そうなのだとしたら……

⑤私ってば、なんて恥ずかしいやつなんだろう。思い上がって独りよがりて、私こそ、ナニサマって感じ……

「……良子ちゃんが私のことを好きって……」

回り回ってようやく、樹絵里が言おうとしていたことに気づいた。樹絵里が「うん」とうなずく。

「言ったでしょ？ みんな、くーちゃんとは二人組になったがるの」

「なんで？」

「うーん、うまく言えないけど、くーちゃんは絶対相手を拒絶（きょぜつ）しないから、かな？ くーちゃんは気づかなかったみたいだけど、良子ちゃんはいつもくーちゃんのこと狙（ねら）ってたよ。私、いつもハラハラしてた。だからあの人のこと、少し苦手」

「それが理由？ あのキョーレツな悪口とか陰口（かげぐち）とか毒舌（どくぜつ）とかじゃなくて？」

並べ立てたのがおかしかったのか、樹絵里はクスリと笑った。

⑥あの子の悪口（あくぐち）ってさ、闘（たたか）う武器でもあるけど、実は花束でもあるんだよね」

「花……束？」

「私と仲良くしてねって差し出すプレゼント」

「……やなプレゼントだね」

「だってさ、悪口（あくぐち）ってけっこうその場を盛り上げたり、相手と意気投合したりするのに役立つことってあるでしょ」

「う……まあ、確かに」

齊藤先輩の悪口で、女子三人、よく盛り上がってます、はい。それを見た中村先輩から『うちの女子はみんな仲良くていいよね』なんて言われちゃうくらい。

「私はさー、くーちゃん。良子ちゃん、入れてあげてもいいと思うんだよね。だってうちの部くらいじゃん、あの子を迎え入れてあげられそうなのって。たぶん、もうすごい噂（うわさ）になってるだろうし」

「……自業自得（じごうじとく）じゃん」

そうつぶやいてしまってから、あー私ってなんて心が狭（せま）いんだろうと嫌（いや）になった。樹絵里は私のことを優しいなんて言ってくれるけど、それは逆だよ。⑦樹絵里こそ、ほんとの意味で優しいよ。

問一 I「相づちを打つ」(II「相づちを打つ」・II「言葉を失う」(II「言葉を失う」は、それぞれ「く」を打つ)・「言葉をく」という形で広く使われている使い方です。次の中から、そのような使い方をしないものをそれぞれ一つずつ選んで、記号で答えなさい。

I「くを打つ」

A 手を打つ

I 水を打つ

ウ 知恵を打つ

E 胸を打つ

オ 番号を打つ

II「言葉をく」

A 言葉をにごす

I 言葉をのむ

ウ 言葉をはさむ

E 言葉を返す

オ 言葉を割る

問二 ①「二人組」の怖さ」とありますが、どういうことですか。その説明として正しいものを、次の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

A 組を作る時に、組む相手が見つからなかったり、自分がだれから必要とされていいことを思い知らされたりするのではないかと不安。

I 組を作る時に、どうしても一緒にになりたい友だちがいるのに、その人がもしかすると自分のことを選んでくれないのではないかと恐怖。

ウ 組を作る時に、だれも自分を選んでくれる人がおらず、最後にはきらいな人といやいや組まなくてはならないかもしれないという緊張。

E 組を作る時に、いつも一緒にいてくれる人が先に声をかけた人と組んでしまって、自分一人だけ取り残されてしまうかもしれないという心配。

問三 ②「みんなくーちゃんとなら、二人組になりたいって思ってる」とありますが、樹絵里は海月(くーちゃん)をどういう人だと思っているからこのような発言をするのですか、説明しなさい。

問四 ③「樹絵里はにつこりと、それはもう嬉しそうに笑った」とありますが、このときの樹絵里の気持ちの説明として正しいものを、次の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

A 自分のことを海月はきらっているはずなのに、そのこと自体に今まで気づいていなかったというあわてた様子をほほえましく思う気持ち。

I 自分のことを海月は重荷に感じているはずなのに、思った通り気づかいを示して、自分の言葉を打ち消そうとしてくれたことを喜ぶ気持ち。

ウ 自分のことを海月はうっとうしく思っているはずなのに、海月がクラスの中で自分をかばってくれたことを思い出して感謝する気持ち。

E 自分のことを海月は仕方なく受け入れているはずなのに、ことさらそういう気持ちを表に出さないようにしていることに感激する気持ち。

問五 ④「ヒトデナシでヨコシマな動機」とありますが、どういう点で「ヒトデナシ」で「ヨコシマ」なのですか。その説明として正しいものを、次の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

A クラスの中で気まづくなった原因をきらいな樹絵里のせいだと決めつけ、何とか逃げるために、樹絵里には知らせず急に中学受験をしようと決めた点。

I 勉強をするために中学受験を考えるべきなのに、女の子同士の人間関係を清算するというたわいもない理由で中学受験をしようと決めた点。

ウ 樹絵里との関係をつらいと思うことがあったので、その気持ちに素直に従って、樹絵里から離れて自分だけ違う中学でやり直そうとした点。

E 樹絵里さえいなければ自分はいまよくやっていけると考え、樹絵里のせいで気まづくなった人間関係を白紙にもどすために中学受験をしようとした点。

問六 ⑤「私ってば、なんて恥ずかしいやつなんだろう。思い上がって独りよがりで、私こそ、ナニサマって感じ……」とありますが、海月はどういう点を「恥ずかしい」と感じているのですか、樹絵里と比較して説明しなさい。

問七 ⑥「あの子の悪口ってさ、聞く武器でもあるけど、実は花束でもあるんだよね」とありますが、どういうことですか。次の中から正しいものを一つ選んで、記号で答えなさい。

A 悪口は、非難する相手を正面切って傷つけるために言うだけでなく、自分に関心を持ってもらうためにわざとと言うことがあるということ。

I 悪口は、非難する相手に対し自分が優位に立つために言うだけでなく、仲良しだからこそ言える間柄だと示すために言うことがあるということ。

ウ 悪口は、非難する相手を負かすために言うだけでなく、聞いている人みんなが、思い切りストレスの発散ができるように言うことがあるということ。

E 悪口は、非難する相手を攻撃するために言うだけでなく、聞いている人の気持ちを確かめたり、一緒に楽しんだりするために言うことがあるということ。

問八 ⑦「樹絵里こそ、ほんとの意味で優しいよ」とありますが、海月は樹絵里のどういう点を「優しい」と感じているのですか。「自分は、く」のに対し、樹絵里はく点。」という形で説明しなさい。

【採点らん】には
何も記入しないこと。

受験番号

氏名

合計

一

1

2

3

①	①	⑥	①
②	②	⑦	②
③	③	⑧	③
④	④	⑨	④
⑤	⑤	⑩	⑤

二

問一

問二

問三

問四

問五

問六

問七

問八

(2)	(1)	①						Ⓐ
								Ⓑ
		②						